

悩みの『解決』ではなく『解消』する ～ 底が抜けない丈夫な空の器 ～

2026年5月3日（日）は、4連休【『5月3日 憲法記念日』、『4日 みどりの日』、『5日 こどもの日』、『6日 振替休日』】の始まりである。5月3日は、『KBF (Kurume Bible Fellowship) in CAJ (Christian Academy in Japan)』にCAJの小学校の校長を務めていたwifeと赴いた。今回、『いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。』（使徒の働き 第1章7節）の復学の時ともなった。

5月3日 『21世紀の懸け橋 ～ “がん哲学” ～』の112回分を纏めた190ページ製本版（添付）が、『一般社団法人 がん哲学外来事務局担当理事 宮原富士子氏』から送られてきた。【がん哲学外来は、2008年 順天堂大学病院で、期間限定で試験的に開催したところ、全国各地から予約が殺到。キャンセル待ちが50組にものぼった。その後、反響が大きく、大学病院の外に出し“語り合いの場”『がん哲学外来・カフェ』として全国的に展開を始めた。2009年この活動を全国へ展開をしていくことを目指し、樋野興夫を理事長に『特定非営利活動法人に（NPO法人）がん哲学外来』が設立。2011年には、隙間を埋める活動を担う人材の育成と活動を推進する目的で『がん哲学外来市民学会』が市民によって設立されるとともに、『がん哲学外来コーディネーター』養成講座が開始された。2013年7月3日から『一般社団法人 がん哲学外来』と紹介されている。

【概要：『外来』との言葉が入っているが、病院の専門外来ではなく、診察券も必要がない。治療であるカウンセリングとも異なり、医師が患者やその家族の悩みを聞き、同じ目線に立って“対話”をする場だと樋野興夫は説明している。悩みの『解決』ではなく『解消』することが目的である。対話により、その人の中での悩みの優先順位が下がれば、それを問わなくなるが、樋野興夫はそれを『解消』と呼ぶ。】

【きっかけ：2005年にアスベストを原因とする中皮腫患者専門の外来を担当していた樋野興夫は、難治を悩む患者が多いことを受け、主治医と患者の隙間を埋める役割の必要性を感じ始めた。樋野興夫は、『がん哲学外来』は『空っぽの器』のようなもので、『どんなに水を入れても 底が抜けない空の器を用意して、丈夫な器さえあれば、何を話してもいい。』（文春オンラインインタビューより）と話した。】

21世紀の懸け橋 がん哲学

An illustration of three men standing together and shaking hands. The man on the left is wearing a blue suit and glasses. The man in the middle is older, with white hair and a mustache, wearing a brown jacket and glasses. The man on the right is wearing a brown jacket and a blue sash. They are all smiling and appear to be in a friendly conversation.

樋野興夫